

漫画「サザエさん」にみる戦後地域社会像の変遷

—— 地域コミュニケーションの観点からの「量的」分析 ——

植村 勝彦

はじめに

漫画「サザエさん」「エプロンおばさん」「意地悪ばあさん」などの作者、長谷川町子さんが平成4年5月27日亡くなった。政府は、この国民的家庭漫画の作者に「長年にわたる、国民各層に愛され親しまれる優れた漫画により、戦後の我が国社会に潤いと安らぎを与えた（官房長官談話）」功績を認め、10人目の国民栄誉賞を授与してこれに報いた（女性では2人目、漫画家では初）。

「サザエさん」は、最初、昭和21年4月23日から福岡県の地方紙「夕刊フクニチ」に連載された。その後24年12月1日から25年12月31日まで「朝日新聞」の夕刊に、さらに26年4月16日からチック・ヤング氏の「ブロンディ」のあとを受けてその朝刊に発表の場を移し、以降、途中何度かの休載を挟みながら49年2月21日終了するまで、通算6477回連載し、後継のサトウサンペイ氏の「フジ三太郎」に Baton タッチした（朝日朝刊、平成4年7月1日記事による）。

また、連載を集録した単行本は68巻刊行され、約4000万部の超ベストセラーを誇り、さらに原作を翻案したアニメーション「サザエさん」は、昭和44年10月5日の放送を皮切りに平成4年10月末現在24年間1221回（3663作）に達し、平均視聴率28.5%という人気を保持し続けている（朝日夕刊、昭和63年9月19日記事に基づく）。

本論考は、サザエを主人公とするイソノ家三世同居の直系家族の「そのサラリーマン家庭のなかで起こる日々の小さな出来事を素材としながら、戦後の社会経済的環境の変化を作品世界のなかに取り込むことによって、平均的な日本の家族の戦後生活史を見事に映し出している」（寺出、1991）と評される、この漫画「サザエさん」を資料・データとして、第二次大戦後の日本の地域社会の変貌の様相を、人間関係を中心とする地域コミュニケーションの観点から、時系列的に捉えようとするものである。

I 問 題

国民生活審議会調査部会コミュニティ問題小委員会が「コミュニティ —生活の場における人間性の回復—」と題する報告書を公にしたのは、昭和44年9月のことであった。「今日、都市化やモータリゼーションによって地域社会は急速に変貌しつつある。旧来の地域社会は崩壊

し、新しい地域社会はまだできていないという状態が各地にみられる。そこでは地域社会の連帯感が薄れて、人は孤独感、無力感に陥る。いかにわが国の経済成長率が高いといっても、生活の場における人間性が失われたのでは、人間の幸福はありえない」というこの報告書の主旨は多くの共感を呼び、各方面に大きな反響を呼び起こした。戦後の復興期を経て、工業立国を志向して産業優先の地域開発政策をとり続けてきたわが国は、高度成長政策による物質的・経済的豊かさを家庭内および地域内で獲得する一方で、旧来の地域社会は寸断され、家族は孤立し、集団生活の原点といわれる地域連帯は姿を消し、精神的貧しさを、同じく家庭内および地域内に招来することとなったことへの反省を、この報告書は指摘したものであった。

それから四半世紀を経た今日、地域社会は「村おこし」「まちづくり」などのかけ声のもと、コミュニティ形成運動の一定の成果を確かにあげているように思われる。かつての乱開発は影を潜め、公園など憩いの場の環境も整備され、祭りや各種のイベントも復活したり新たに創られたりして、生活の物理的な場としての地域社会、地域活性化のいわばハードの面は徐々に整いつつあるといえよう。

他方、先の国民生活審議会の答申にいう「人間性の回復」に直接関わる、生活の精神的な場としての地域社会の観点からはどうであろうか。近所づきあいなど近隣との人間関係をその基調とする、いわばソフトの面でのコミュニティ形成は、十分というにはいまだ程遠いように思われる。幼児の誘拐事件や独居老人の孤独死などの新聞報道を見るにつけ、地域内の他者への関心や、援助行動の欠如を思わない訳にはいかない。アニメ漫画「サザエさん」が高視聴率を維持し続けているのも、日本人が失ってしまった家庭像や地域像の理想の姿をそこにみて、郷愁とあこがれを抱くからではないだろうか。

しかし、また一方で、このように地域社会の環境が以前に比べ人間的でなくなり、地域内での交流が減少した結果地域連帯が弱まったとしても、それは、戦後の時代の流れの中でその時々々の社会的背景に原因があった場合もあろうし、あるいは、人々が自分にとって住み易い環境を志向した結果が、今日の地域社会の人間関係を形成するに至った場合もあるとして、現状を肯定する見方もありえよう。ともあれ、戦後、地域社会が大きく変化し、その変貌ぶりに危機感を抱いた当時の政府や地方自治体、さらには民間団体や学界が、昭和40年代後半以降、新たな「コミュニティ形成」を目指して始動し、今日に至っているのである。

ところで、国民生活審議会の答申がいうように、またその時代を生活者として体験してきたわれわれ自身が、旧来の地域共同体の変貌を実感しているのだが、具体的に、生活のどのような領域の、どのような場面や事象で形骸化、空洞化、縮小化、あるいは肥大化など崩壊につながる現象が生じたのかについては、データとして呈示し得るものは、必ずしも多くはない。本論考は、この点に焦点を合わせて、とくに人間関係を中心とする地域コミュニケーションの観点から、ある生活事象が時間（時代）と共に量が減少（あるいは増大）し、また質が変容していくことの検証を通して、旧来の地域社会の崩壊過程を明らかにしようとするものである。

では、地域社会での生活の中の人間関係面に焦点を合わせた場合、時代と共に「何が」「どのように」「どれほど」変化したのかを検証するには、どうすればよいのであろうか。ものの

変化には有形のものと無形のものがあるが、有形のものについては、度数や数値の計測に基づく統計数値の推移（例えば、テレビの保有状況、公園面積、犯罪件数などの変化）や、写真または実物の呈示（例えば、電化製品や都市景観などの変化）によって示されよう。一方、人間の心情や価値観など無形のものの変化については、いわゆる意識調査を継続的に行うことによって追跡する方法が代表的なものであろう。しかし、前者の統計数値においてすら、地域社会の変化という観点に照らしてみた場合、意にかなうものがなかなか得られないのが実状であることをみれば、後者の場合はいっそう厳しく、現実には、文部省統計数理研究所の「日本人の国民性」調査や、NHK放送文化研究所の一部の調査を除いて、長期にわたる時系列のデータは存在しない。まして、地域社会の人間関係に関する変化を、時系列的に扱ったものなど得られようはずもない。

日本人の心情や価値観の変化を時代との関連で問うという、この種の問題意識に対して、これまで取り上げられてきた原資料（マテリアル）としては、筆者の知るところでは、ベストセラー小説（見田、1965）、流行歌（見田、1967、高橋、1974）、生活雑誌（野崎、1985）がある。

ベストセラーの分析において、見田は「私の知りたいのはベストセラーそれ自体ではなく、その背後にある国民の欲求ないし関心のあり方のうつりかわりであった」として、7項目設定したテーマごとの年度別著書売上順位を得点化して、その推移から戦後心理史を描き出そうとしている。高橋は「都会人とその故郷とは、この百年のあいだどのようにつながってきたのか。これがわれわれのここでの課題である。このつながりをみれば、故郷が意識構造の一要素であるかないかが知られよう」といい、明治以来の唱歌、流行歌、詩、さらには小説をも援用しながら、都市における日本人の意識構造に迫ろうとしている。さらに野崎は、戦後の「女性論としてではなく、生活の中での主婦像の変遷を捉えよう」として、雑誌「主婦の友」の記事を5年おきに精読するという方法で分析している。

紹介したこれらマテリアル以外にも、もちろん、毎日の新聞紙面を賑わす各種事件やトピックスを題材に、テーマにそって年代別に巨視的にまとめたものもある。「欲望の戦後史」（石川弘義、1981）「戦後欲望史」（赤塚行雄、1985）「昭和ことば史60年」（稲垣吉彦・吉沢典男、1985）など、例はいくらかもある。世相の宝庫である新聞、雑誌、テレビ番組（コマーシャルを含む）、などのマスメディアのみならず、同人誌、ミニコミ誌、チラシ、パンフレットの類に至るまで、マテリアルはいくらかもあり、テーマと視点を定めてことに当たれば、時系列の意識調査データと共に、人々の心情や価値観など無形のものの変化を追究することは十分可能であろう。

こうした状況のなかで、本論文では、朝日新聞に連載された漫画「サザエさん」をマテリアルとして取り上げる。「サザエさんほど、さまざまな観点から分析された漫画は珍しいだろう」と、作者の死亡記事の「評伝」は述べているが（朝日朝刊、7月1日）、筆者はそのほとんどを不幸にして知らない。主婦を主人公にした初めての漫画という点から推測するに、戦後の庶民の生活史の観点、戦後女性史の観点、家族内の人間関係（の変容）の観点、子供の日常生活（の変容）の観点など、それらの多くは家庭像、家族像、子供像のものではなかったか。例えば、比較的最近の研究を例に挙げれば、樋口（1978）は、30年分通して読むと、戦後間もない

頃の暮らしぶりが、豊かに便利に、小ざれいになっていく「その“豊かさ”と引き換えに、貧しく狭められたものがあることがはっきり見えてくる。とくに子どもの世界にそれがはっきりあらわれている」といい、「カツオくんとワカメちゃんという2人の小学生を通して、子どもをとり巻く教育環境の歴史でもある」として、都市環境の変化と教育の関係を論じている。また山根（1987）は、イソノ家の主人、父親としての波平像に焦点を絞り、家族との関わりにおいてその人間像を浮かび上がらせることを通して、戦後の父親像の変遷を分析している。そして「昭和30年代後半から一家の長としての役割と威厳を持ち合わせた本来の父親の姿が次第に寂しく孤独なものへと色あせていく。……中略……そしてその変化は、父親自らが変容したというよりも、彼をとり囲む家族、あるいは社会そのものの変貌により、変わらざるを得ない状況にあったためだといえる」と分析している。また、増淵（1991）は、近年人気のさくらももこの漫画「ちびまる子ちゃん」との対比から、両者の共通性と異質性を、家族の人間関係や茶の間の文化比較の観点から考察している。さらに雑誌「サライ」は1991年11月7日号に「漫画『サザエさん』に見る戦後庶民生活史」と題する特集を組み、電化製品を中心に生活用品の家庭への普及とその変遷を紹介している。

変貌とその結果としての崩壊が言われながら、しかしまだ新しいコミュニティの形成についての機運や条件が整わない、つまり崩壊の過程を辿りつつ、それに任されていた地域社会の時代の存在を、人間関係を中心とする地域コミュニケーションの観点から、時系列的に検証するという本論考の主旨に照らした場合、この漫画「サザエさん」がマテリアルとして分析に適していると考えられる理由は次のようである。第一の、最大の理由は、戦後の復興期から高度経済成長期を経て、低成長期の入り口に至る26年間にもわたって、庶民の生活を描いた作品は他に見あたらないこと、第二に、この連載の時期が本論文の主題である、旧来の地域社会の変貌過程と対応しており好都合であること、第三に、登場人物の年齢・家族構成が不変であるのに対し、時代設定が現実時間と同時進行であることから、その時々時代の背景の中で人物の行動や風俗が描かれ、時代間比較するのに都合がよいこと（「ちびまる子ちゃん」と違い、回顧的手法の作品ではない点で異なる）、第四に、女性の作者であることが、日常生活の細部にわたる観察を可能にさせ、家族や地域の日常の様子をよく描き出していること、第五に、東京の旧来の（世田谷区辺り）住宅地に居住する、サラリーマン家族という、平均的都市生活者の平凡さを備えていること（時代の先端を切る家族ではない）、第六に、3世代同居家族で、各年齢層の家族内・家族間生活が平均して描かれ、また相互の交流も描かれていること、最後に、全作品が単行本として刊行されており、容易に入手可能なこと、などである。

ただ、先の山根（1987）が、その分析の結果から「特に38年あたりから、作者の視点は家庭と社会の調和的なつながりから家庭や社会そのものへの批判へと移行して」いき、「“家庭漫画”から“風刺漫画”へ、戦後の歴史とともにあった『サザエさん』の真の姿とは、そのようなものであった」と指摘するように、必ずしも初期のほのぼのとした暖かい家庭漫画、という一貫した姿勢で貫かれていた訳ではないようである。また、作者の年齢が27歳の若妻サザエさんと隔たるにしたがい、視点も移っていったことは容易に推測される。このように、この作品が、

当然のことながら作者の好みや関心など、作者の“眼”を通したものであり、“客観的事実”を必ずしも反映していないという限界が存在していることを踏まえたうえで、なお上に述べたような特徴と利点に加えて、特定のイデオロギーに支えられたものではない点を重視するが故に、この作品を採用するものである。

以上に述べたように、本論文は、漫画「サザエさん」をマテリアルとして、われわれが実感としてもつ戦後の地域社会の諸側面の変貌の様相が、時代と同時進行の漫画の中に描かれ、かつ、それが一定の傾向をもつものとして捉えうるかどうかを検討しようとするものであるが、その際、地域社会の「何が」「どのように」「どれほど」変貌したのかを明らかにすることが求められる。本稿では、このうち「何が」「どれほど」に限って、つまり、地域社会の中のある事象についての時系列の「量的」な変化の様相に限定して分析・検討するものである。「どのように」に相当する「質的」分析については、後日稿を改めたい。

Ⅱ 方 法

1) 分析対象・資料

昭和24年12月1日朝日新聞夕刊に掲載され始めてから、26年4月16日に朝刊への移行を経て、昭和49年2月21日に終了するまでの「朝日新聞」連載分を収録した単行本「サザエさん」第5巻から第68巻（姉妹社刊）所収の4コマ漫画5788篇を分析の対象とする。その内訳を示したも

表1 分析対象作品の発表年別内訳（全5738作品）

昭和（西暦）	巻 - ページ	作品数	昭和（西暦）	巻 - ページ	作品数
24 (1949)	5-01~ 5-31	26 ¹⁾	37 (1962)	35-72~38-86	303
25 (1950)	5-32~ 8-59	237 ²⁾	38 (1963)	38-87~41-40	242
26 (1951)	8-60~11-71	227 ³⁾	39 (1964)	41-41~44-70	303
27 (1952)	11-72~15-93	299 ⁴⁾	40 (1965)	44-71~47-96	314
28 (1953)	15-94~18-57	202 ⁵⁾	41 (1966)	48-01~51-32	314
29 (1954)	18-58~20-12	147	42 (1967)	51-33~54-23	274
30 (1955)	20-13~22-61	241	43 (1968)	54-24~57-21	286
31 (1956)	22-62~25-90	317	44 (1969)	57-22~60-21	288
32 (1957)	25-91~28-78	276	45 (1970)	60-22~62-92	263
33 (1958)	28-79~32-17	323	46 (1971)	62-93~64-72	172
34 (1959)	32-18~33-91	170	47 (1972)	64-73~65-41	65
35 (1960)	33-92~34-78	80	48 (1973)	65-42~68-12	259
36 (1961)	35-01~35-71	71	49 (1974)	68-13~68-51	39 ⁶⁾

注 1) 12月のみ

2) マスオら大阪旅行13話分カット

3) 箱根家族旅行11話分カット

4) カツオら静岡旅行17話分カット

5) サザエら小田原旅行9話分カット

6) 2月21日まで

のが表1であるが、このうち「注」に記したように、イソノ家の誰かが旅行に出て、ストーリーもそれを連日描いている部分は、分析から外した。その結果、最終的に対象作品数は5738篇となった。

2) 分析カテゴリーの設定

全巻を通読し、地域社会での生活やそれとの関連を描いた内容を書き出してカード化し、それを分類・整理することによって、カテゴリーの枠組みを帰納的に設定した。表2はその内訳を示したものであるが、結果的に7領域、35カテゴリーに集約された。地域社会を取り上げる場合、当然現れるはずの「町内会・自治会」「婦人会」「子ども会」といった組織に基づくカテゴリーが存在していないが、これは作品中に活動場面がほとんど描かれていないことによる(回覧版が回ってくる場面が1回、婦人会の忘年会と思しき場面が2回、夏休みの子どもの早朝清掃活動が2回のみである。いずれも上記の組織による活動であるとの判定は下しがたい)。家族内の人間関係を扱ったものや、地域生活とは無関連の家族行事や行為(旅行や行楽に行く、地域外の客がイソノ家を訪問している、地域外の家をイソノ家の者が訪問するなど)は取り上げていない。また、選挙運動や演説も、地域との関連がはっきりしないことから省略した。

3) 分析手続き

各4コマの漫画1篇を1サンプルとし、そこに描かれた内容が表2のカテゴリーのいずれかに該当するものをチェックする。1つのサンプルがいくつものカテゴリーに該当する場合、その重複は妨げない。チェックに際しての注意点は、1)夢の中の話や架空の話、たとえ話、おとぎ話(狸が化けたり、神様の登場)などに描かれている内容の場合は除外する、2)話の内容に直接コミットしていないイソノ家の人物が登場している場合は除外する(カツオが道端に立っているのが画面の隅に描かれている、サザエがその他大勢の1人として描かれているなど)、3)吹き出しの中の言葉だけで表現されていて、実行場面の絵がない場合は除外する(「カツオ、お使いに行ってきたくれたの」「うん、そこにおいといたよ」など)、4)その行為の直前まで描かれているが、実行場面の絵がない場合は除外する(カツオがバットをもって外へ遊びに行こうとしている絵はあるが、外で遊んでいる絵はないなど)。つまり“絵”として、上記のカテゴリーに該当する場面が4コマの漫画に描かれており、主人公が誰でもよい場合は別として、ストーリー中でイソノ家の者が何らかの役割を演じていると判断される場合のみ、チェックするというものである。こうして、カテゴリー別に、1年ごとに集計したものをデータとする。

Ⅲ 結果と考察

昭和24年から49年にわたる26年間の年別、カテゴリー別の集計結果を掲載するのは膨大な表になるので割愛し、5年刻みに集約したものが表3である。時代による推移を検証することを目的としていることから、どの年で区切るかは大きな意味をもつ。ここでは、単純に5年刻みと

表2 分析カテゴリーの枠組み

領域	内 容
A 近 隣 コ ミ ュ ニ ケ ー	1 イソノ家の大人が地域内の他人と物の貸し借り、贈答をしている場面
	2 イソノ家の大人が地域内の他人にものをたのみ、たのまれしている場面
	3 イソノ家を隣近所の大人が訪れている場面
	4 イソノ家の大人が隣近所の家を訪問している場面
	5 イソノ家を郵便・新聞配達、往診の医者・アンマ、僧侶などが訪れている場面
	6 イソノ家の大人の女が道端・隣家との境越しに立ち話をしている場面（地域内に限る）
	7 イソノ家の大人の男が道端・隣家との境越しに立ち話をしている場面（同上）
B 生 活 費	1 イソノ家を御用聞き、職人、セールスマン、押し売りなどが訪れている場面
	2 イソノ家の者が地域内の商店で買い物をしている場面（露店・床屋・医院・屋台を含む）
	3 イソノ家の者が地域外の商店で買い物をしている場面（デパート・都心の店舗など）
C 子 ど も の 日 常 生 活	1 カツオ・ワカメが友達と地域内の屋外で遊んでいる場面
	2 カツオ・ワカメが家族（きょうだいを含む）と地域内の屋外で遊んでいる場面
	3 カツオ・ワカメが一人（大人の相手を含む）で地域内の屋外で遊んでいる場面
	4 カツオ・ワカメが自宅の室内で遊んでいる場面（本・テレビ・ラジオ・お話などを含む）
	5 カツオ・ワカメが自宅の庭で遊んでいる場面（友人がいても可）
	6 カツオ・ワカメが友人宅で遊んでいる場面
	7 カツオ・ワカメが他家（友人ではない）で遊んでいる場面
	8 カツオ・ワカメが家で勉強している場面（友人宅を含む）
	9 カツオ・ワカメが家の手伝いをしている場面
	10 塾・お稽古ごとの場面（子供が主人公であれば誰でも可）
	11 受験勉強・入試の場面（幼稚園から大学まで主人公はだれでも可）
D 娯 楽	1 地域内のイベント場面（祭・小学校運動会・七五三・出初め式・歳末大売り出しなど）
	2 銭湯の出でくる場面
E 治 安 関 心	1 他人への関心、親切、正義感、援助行動の場面（主人公は誰でも可）
	2 他人への無関心、不親切、不正義、無援助の場面（同上）
	3 警察官の出でくる場面（いわゆるお巡りさん。交通警察官は含まず）
	4 泥棒の出でくる場面（電車内のスリなど、地域外のもの含まず）
F 地 域 環 境	1 地域内の原っぱ、広場、川などが出でくる場面
	2 地域内の公園が出でくる場面（神社・寺の境内を含む）
	3 地域外の公園・遊園地・行楽地の場面（動物園・海水浴場・ゴルフ場・キャンプ場は含まず）
	4 公害（食品公害を含む）関連場面（会話内や看板などだけでも可）
	5 交通事故・事故寸前・渋滞場面
	6 風俗営業が出でくる場面（バー・パチンコ店・麻雀屋・ストリップ劇場など）
G 福 祉	1 福祉対象としての老人が出でくる場面
	2 浮浪者が出でくる場面

し、かつ最初の年（昭和24年）が12月のみであることからこれを翌年に組み込むかたちにして、第1期（24年から29年）のみ6年間として処理したものである。この操作を行った背景には、先に紹介した山根（1987）も同様の方法を採用しており、相互の関係を見比べる機会がある場合には便利であるとの判断も働いている。

次に、この年別出現比率の一覧から、これら数値の推移状況が、一定の傾向を示すとみなし得るか否か、つまりあるカテゴリーの出現率が年を追う毎に増加あるいは減少する傾向が確認さ

れ得るかどうかを検討した。この傾向分析の検定には、岩原（1965）の紹介する“比の直線回帰の検定”を用いた。

これは、カテゴリ（ここでは各年がそれに該当）が X_1, X_2, \dots, X_k と k 個あり、このカテゴリ値が間隔尺度であるとき、いま各 X_j のカテゴリに n_j 個が測定され（ここでは1年毎の作品総数に該当）、そのうち A なる特性を有するものが a_j 個（ここではチェックされた作品の数に該当）、それ以外を $(n_j - a_j)$ 個とすると、 a_j/n_j が X_j に属するものの A 特性を有する比率であるが、それが X_j と直線回帰をなすことの検定は、自由度1のカイ2乗分布をする近似式によって計算できる（著者注：式は省略）というものである（岩原、p.381）。この検定を行った結果が表3の右半分であり、それには26年間1年毎の場合と、同表の左半分に提示した5年刻みのデータの場合の両者を掲げた。有意水準に多少の違いはあるものの、両者はまったく同じ傾向の検定結果を示しており、5年刻みというような大づかみなまとめ方で出現率の傾向を表現しなくても、変化の見られるカテゴリについては、1年毎に着実に一定の推移傾向を示していることが確認されたことを表すものである。なお、以下に示した図中の直線は、計算に基づく回帰直線である。

以下に、領域毎にその様相を考察することとする。

A 近隣コミュニケーション

いわゆる近所づきあいの諸相を7つのカテゴリに分けて取り上げたものである。

A1では、戦後まだ生活物資の乏しかった頃盛んに行われた食料品や日用品の貸借、“おすわけ”と称する到来品や自家製食品の贈答も、生活が豊かになり、物資も豊富に出回るようになり、冷蔵庫の普及で長期保存が可能となり、さらにスーパーマーケットやコンビニエンスストアの出現によっていつでも購入できるような販売体制になるにしたがって、ものの貸し借りや贈答も減少していったことを示すものであろう。

A2の「イソノ家の大人が地域内の他人にものをたのみ、たのまれしている場面」の減少は、高橋（1984）が都市的生活の特徴としてあげる“生活の社会化”と“生活の個人化”のうちの後者によるもので、生活の個人化が“人間関係の省略”つまり、人間関係の欠如、人間関係の機械化による消失、人間関係の拒否や拒絶、人間関係の間接化や偏りを生み、自分の生活を維持していくうえで別に支障がないと思われる限り人間関係の省略化が進行していく。そしてこれはまた地域社会における人々の役割の変化であり、社会関係の省略として理解することができる。こうして、都市化が進み、都市的生活者が増加するにつれてこの傾向はますます進行していくことになる。

A3・A4はお互いの家の往来である。これも、戦後の質素な家の造りの時代から、プライバシー重視の風潮にのって塀が巡らされ、しかもそれも次第に高くなり、縁側が姿を消し、立派な玄関構えになるにしたがって、気軽に他家を訪問することが、気持ちのうえでもはばかれるようになった結果を反映しているであろう。図1は「A3 イソノ家を隣近所の人が訪れている場面」の推移を示したものである。

表3 5年刻みのカテゴリ別出現比率(%)と比率の直線回帰の検定

領域	カテゴリ	s 24 ~ s 29	s 30 ~ s 34	s 35 ~ s 39	s 40 ~ s 44	s 45 ~ s 49	χ ² 検定 (df=1)	
							1年刻みの場合	5年刻みの場合
A 近隣 コミュニ ティ	1	18(1.58)	15(1.13)	17(1.70)	9(0.61)	1(0.13)	12.376 ↓ ***	10.924 ***
	2	17(1.49)	13(0.98)	12(1.20)	10(0.68)	4(0.50)	6.104 ↓ *	5.592 *
	3	23(2.02)	15(1.13)	15(1.50)	10(0.68)	2(0.25)	15.329 ↓ ***	14.287 ***
	4	27(2.37)	36(2.71)	28(2.80)	17(1.15)	10(1.25)	8.621 ↓ **	8.374 **
	5	24(2.11)	16(1.21)	12(1.20)	15(1.02)	2(0.25)	14.717 ↓ ***	11.956 ***
	6	25(2.20)	34(2.56)	41(4.10)	52(3.52)	28(3.51)	5.077 ↑ *	5.182 *
	7	7(0.62)	12(0.90)	14(1.40)	11(0.75)	6(0.75)	0.075	0.029
B 生活費	1	37(3.25)	28(2.11)	27(2.70)	22(1.49)	8(1.00)	15.930 ↓ ***	12.718 ***
	2	58(5.10)	62(4.67)	41(4.10)	54(3.66)	25(3.13)	6.672 ↓ **	6.375 *
	3	19(1.67)	7(0.53)	6(0.60)	12(0.81)	5(0.63)	3.257	
C 子ども の日常 生活	1	42(3.69)	72(5.43)	33(3.30)	36(2.44)	11(1.38)	17.728 ↓ ***	18.685 ***
	2	23(2.02)	20(1.51)	7(0.70)	13(0.88)	11(1.38)	4.130 ↓ *	4.365 *
	3	45(3.95)	46(3.47)	25(2.50)	19(1.29)	17(2.13)	19.423 ↓ ***	17.553 ***
	4	73(6.71)	90(6.78)	50(5.01)	68(4.61)	54(6.77)	1.520	1.457
	5	17(1.49)	29(2.19)	17(1.70)	18(1.22)	6(0.75)	4.458 ↓ *	5.540 *
	6	6(0.53)	7(0.53)	6(0.60)	10(0.68)	13(1.63)	4.207 ↑ *	5.719 *
	7	5(0.44)	11(0.83)	8(0.80)	18(1.22)	6(0.75)	3.143	2.075
	8	15(1.32)	20(1.51)	11(1.10)	24(1.63)	4(0.50)	0.799	0.931
	9	43(3.78)	41(3.09)	30(3.00)	24(1.63)	20(2.51)	9.943 ↓ **	8.326 **
	10	4(0.35)	1(0.08)	5(0.50)	8(0.54)	0(0.00)	0.011	0.014
	11	3(0.26)	15(1.13)	13(1.30)	15(1.02)	15(1.88)	6.828 ↑ **	7.959 **
D 娯楽	1	26(2.28)	26(1.96)	12(1.20)	15(1.02)	6(0.75)	15.617 ↓ ***	12.144 ***
	2	6(0.53)	9(0.68)	9(0.90)	11(0.75)	3(0.38)	0.015	0.003
E 治安 地域関 心	1	66(5.80)	57(4.30)	44(4.40)	37(2.51)	23(2.88)	19.006 ↓ ***	18.111 ***
	2	2(0.18)	0(0.00)	7(0.70)	9(0.61)	5(0.63)	6.904 ↑ **	7.000 **
	3	17(1.49)	28(2.11)	32(3.20)	25(1.69)	14(1.75)	0.750	0.014
	4	5(0.44)	11(0.83)	17(1.70)	11(0.75)	17(2.13)	9.836 ↑ **	7.959 **
F 地域 環境	1	33(2.90)	51(3.84)	22(2.20)	28(1.90)	14(1.75)	8.938 ↓ **	8.483 **
	2	20(1.76)	25(1.88)	14(1.40)	24(1.63)	20(2.51)	0.110	0.393
	3	9(0.79)	21(1.58)	14(1.40)	22(1.49)	14(1.75)	2.233	2.347
	4	0(0.00)	1(0.15)	2(0.20)	7(0.47)	23(2.88)	45.690 ↑ ***	50.492 ***
	5	2(0.18)	9(0.68)	6(0.60)	18(1.22)	8(1.00)	7.932 ↑ **	7.991 **
	6	1(0.09)	2(0.15)	1(0.10)	21(1.42)	2(0.25)	9.346 ↑ **	11.231 ***
G 福祉	1	0(0.00)	0(0.00)	1(0.10)	2(0.14)	9(1.13)	17.626 ↑ ***	20.342 ***
	2	11(0.97)	9(0.68)	3(0.30)	6(0.41)	1(0.13)	7.618 ↓ **	7.491 **
作品数		1138	1327	999	1476	798		

注1) *** P ≤ 0.001 ** P ≤ 0.01 * P ≤ 0.05

注2) ↓ 減少 ↑ 増加 (5年刻みの場合も同一傾向のため記号は省略)

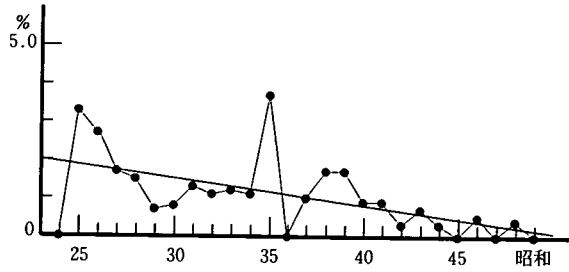


図1 イソノ家を隣近所の人が訪れている場面

A 5は、後述する「B 1」のいわゆる“セールス関連”とは区別しての職業の人の訪問を取り上げてみたものである。郵便受けや新聞受けが設置されていなかった時代には、配達人がわざわざ家の中まで届けてくれたことが解るのであるが、それにも増して、医者やアンの往診風景がいつの頃からか姿を消した現実を、この分析結果は示している。今も変わらないのは、僧侶の檀家回りの姿であろうか。

いわゆる主婦の“井戸端会議”を扱ったA 6と、その男性版のA 7については、予想に反する結果となった。A 7の場面については、むしろ主婦のデータを明確なものにするという意図から分けたもので、当初より確たる仮説があった訳ではなく、むしろ変化はないだろうと予測していた方で、その点でこの結果はそれを支持するものとなっている。これに対して、主婦の“井戸端会議”は、先に述べた「A 2」と同様、生活の個人化が進むにしたがい減少すると予想していたのであるが、逆の傾向を示す結果となっている。その原因や理由については、場面の内容からの質的な分析に待たねばならないので、ここでの考察は差し控えたい。

以上にみたように、「近隣コミュニケーション」領域に属するほとんどのカテゴリにおいて、時間の推移と共にその生起の状況が減少する傾向が、統計的に有意に示された。地域社会における人間関係の衰退が、地域の崩壊の大きな要因であることは疑いのないものであることから、このデータはそれを裏づけるものとなっているといえよう。

B 消費生活

地域コミュニケーションの観点から消費生活をみると、それはとりもなおさず売り手と買い手の間の相互交渉・交換過程として把握できる。双方の直接の交渉が主体であった時代から、人手不足、経営の合理化、流通機構の変化、消費者意識の変化などによって、自動販売機を象徴的産物とする省力化、無人化の販売形態へ、またスーパーマーケットなどにみられる店舗の大型化、多角化、量販化の結果としての地元零細小売業者の消滅へと、消費生活や消費者行動も変わってきた。その結果、消費生活におけるコミュニケーション行動も大きく変化したといわざるを得ない。こうした現実の移り変わりが、漫画の中にも反映されているかどうか検討しようとしたものである。

図2は、B 1の結果を示したものである。酒屋、米屋、八百屋などの御用聞き、左官、植木、

畳などの職人、そば、うなぎなど店屋物の配達など、画面からも着実に減っていつている。そして、今となってはなつかしい炭や氷の配達、あるいはゴム紐などの押し売りの姿も昭和40年頃までの漫画には登場していたことが解る。それに代わって後半に登場するのが、回数はそれぞれ1回だけだが、自動車、ベッド、いかがわしい地震探知機と称するものなどのセールスマン、銀行や生命保険の勧誘員の出現である。

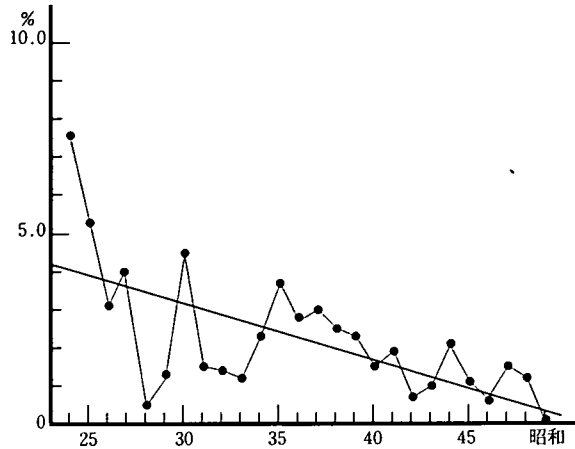


図2 イソノ家を御用聞き・職人・セールスマン・押し売りなどが訪れている場面

B2とB3は、買い物場面を取り上げたものである。地域内での日用品の買い物と、都心の店舗やデパートでの多少改まった品（高級品）の買い物という区別を意図して分けている。予想通り、ここでも上述した現象が現れており、地域内での買い物場面が次第に減少する傾向にあることが検証された。B2に関連する場面に限らず、「サザエさん」には実に数多くの職業が登場するのであるが、昭和30年代初期までの職種の豊富さに比べ、次第に描かれる職業が固定化していくことが解る。敗戦後の窮乏の時代、何でもが商売の対象となったものが、社会の安定と共に淘汰されていったことを物語るものであろう。

これに対して、B3の、地域外での買い物については、時代による変化はみられない。これも予想通りであり、非日常性の品物の消費行動は、地域とは無縁であることを示すものである。

C 子どもの日常生活

先に紹介した国民生活審議会の報告書において、コミュニティ問題小委員会の委員長を務めた清水（1969）は、その報告の前文で次のように述べている。「『子供は夫婦のカスガイ』という言葉があるが、コミュニティにおいても、子供は隣人を結びつける重要な役割を果すし、子供を介してコミュニティの必要性が理解できる。ここにおいて、『子供はコミュニティのカスガイ』と言いかえることができる」と。これを受けて、ここでは子供の地域社会での生活を11のカテゴリに分けて分析した。ただし、大きくは遊び（屋外・室内）、勉強、手伝いの3分類で、

それぞれの内容をより明確にするために細分化して11分類となったものである。

まず、遊びについて、カツオ・ワカメのいずれかが、誰と、どこで遊んでいるかによって7カテゴリに分けた。当初、屋外・室内のみの分類で行ったのであるが、子供の遊びを考える場合、最近小学校の教師間で言われる“さんま（3間）”問題、すなわち遊びの時間、空間、仲間の欠如の観点を考慮すべきとの判断から、再分析を行ったものである。

「屋外・室内」の分類基準でみれば、屋外での遊び（C1・2・3・5）が時代と共に確実に減少していることが解る。これは、後述する「F 地域環境」の、F1（地域内の原っぱ、広場、川などが出てくる場面）とも連動して、地域開発が進み、整備され、地価高騰の時代が押し寄せると共に、子供達が地域社会から閉め出されていったこと、さらには、テレビの普及や、受験の激化と共に、子供を家庭内に係留してしまったことなどによるものと推測される。一方、室内での遊びについては変化はなく（C4・7）イソノ家に見る限り、屋外遊びの減少が室内遊びの増加と連関する結果には必ずしもなっていない。ただし、C6（友人宅での遊び）の増加となって現れており、それを予測させるものとも見ることもできる。遊び場面の代表的な結果として、「C1 カツオ・ワカメが友達と地域内の屋外で遊んでいる場面」を示したのが図3である。

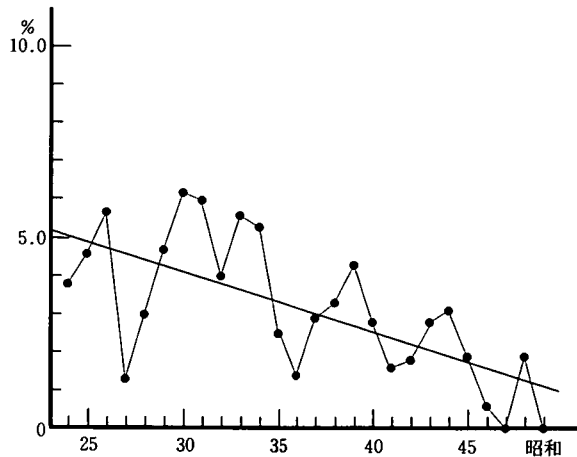


図3 カツオ・ワカメが友達と地域内の屋外で遊んでいる場面

勉強について、「サザエさん」には、カツオやワカメが机に向かっている場面はそれほど多くはなく（全74話、年平均3話）、毎年恒例の「夏休みの宿題騒動」が主なものである。カツオに東大生の実験教師がつく話が2回出てくるものの継続性はなく、少なくともイソノ家の子供たちは勉強や受験競争の世界からは解放されているかにみえる。それが結果にも現れており、時代による変化は認められない（C8）。ただ、微妙に勉強の質が変わってきているようにもみえ、その代償のかたちで、イソノ家以外の人物を登場させることで、時代背景としての受験戦争を描いており、それは時代と共に増加している（C11）。この内容分析については、稿

を改めたい。

手伝いについては、樋口は、長谷川町子追悼番組「サザエさん ～4コマ家族の30年～」¹⁾のなかで、イソノ家の子供たちの家事の手伝いにふれて、カツオが希にみるよくお手伝いする子供であるとしたうえで、「長谷川町子さんは、カツオくんという小学5年生の男の子に、一つの信念をもつかのように断固として家の手伝いをさせている。女の子であるワカメちゃんはそれほど大きな手伝いはさせていない。この姿勢は、連載当初から一貫して変わらない。これは、日本の家庭教育のなかでは、希にみるほどの新しさである」旨の発言をしている。この、希にみるよく手伝いをすると言われた、イソノ家の子供たちも、回数をチェックする限り、時代が下るにつれて歴然と下降線を辿っていくことになる(C9)。作者の“信念”がどのようであったかはともかく、社会の流れは、子供に手伝いをさせることを放棄する方向へと動いていったことを、この結果は示している。

以上のように、“コミュニティのかすがい”であるべき子供たちの姿が、地域社会から次第に消えていく様子を、漫画「サザエさん」は巧まずして描き出しているといえよう。

D 娯 楽

地域社会における庶民の娯楽を、祭りや歳末の大売り出し、あるいはある時代までは確実に地域の一大イベントであった小学校の運動会などの地域の娯楽行事と、これも家庭に風呂が行き渡らなかつたある時代までの、都市生活者にとってのコミュニケーションの場であった銭湯を取り上げたものである。

イソノ家には当初より自家風呂があるにもかかわらず(6巻 P14)、男たちは銭湯にも出かけている。銭湯が庶民のコミュニケーションのセンターの役割を果たしていたことを示すものであろう。「サザエさんには、たべ物とドロボウと、おフロのマンガがよく出てくると何かに書いてありましたが、ドロボウとはとにかく、作者が入浴ずきであることは、たしかです(51巻、P96)と打ち明けているように、回数は多くないものの、各家庭に自家風呂が普及した昭和40年代になっても、銭湯が描き続けられていることは、作者の趣味の現れと共に、庶民の娯楽センターとしての意義を感じとっていたのかも知れない(D2)。

他方、「D1 地域内のイベント場面」については、図4に示すとおりである。テレビが普及する以前の、娯楽の乏しかった時代には、地域の祭りは最大の娯楽行事であった。また、小学校の運動会も、通学団を構成する地域単位の対抗競技が生まれ、老人から入学前の幼児までを取り込んで、春と秋の年2回の一大地域行事であった。貧しく多忙で、楽しみの少なかった時代には、ちょっとした出来事にもその中に喜びを見つけようとしていたのであろう。そんな時代に登場したのがテレビであった(イソノ家にテレビが入ったのは昭和36年)。昭和34年の皇太子ご成婚で白黒テレビが、39年の東京オリンピックでカラーテレビがその家庭への普及のきっかけをつくったといわれるように、テレビの普及は映画をはじめ数多くの大衆娯楽を衰退させ、人々を家の中に保留するきわめて魅力的な道具となった。図4からも窺えるように、30年代後半からの減少が著しいのは、この影響によるものと考えてよいであろう。

時を同じくして、自動車の家庭への普及（イソノ家には車は最後まで無い）は生活行動圏を拡大すると共に、旧来の狭い地域社会への依存度を弱めることになり、同じく電話の普及（イソノ家には昭和46年に敷設）は人々の対面の機会を奪い、こうして地域社会の人間関係は次第に希薄化し、当然コミュニケーションも減少していくことになった（植村、1977）。

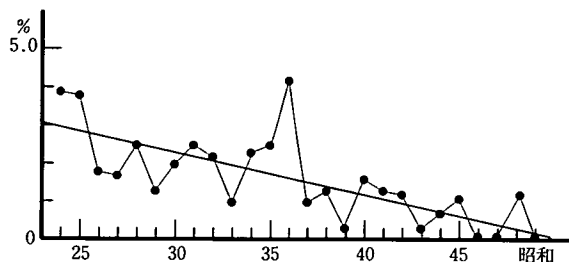


図4 地域内のイベント場面

E 地域社会への関心・治安

かつて Milgram (1970) は、都会人の地域無関心や冷淡な行動は、都市という刺激過多の生活環境で人が生きていくための適応の仕方であり、個人の許容量を越えて流入しようとする刺激からわが身を守る、一種の防衛反応であるとの説を発表した。他者に対する関心、親切、公德心、援助行動、ボランティア精神、正義感など、地域社会および他者の生活への関心は、都市化が進み、都市的生活者がふえるにしたがって衰退し、非援助的、傍観者的になるが、これは当事者の立場からいえば、都市生活への適応の過程であるというものであった。

E 1 と E 2 は、この地域社会への「関心」と「無関心」という相反する場面を取り上げたものである。一方が減少するにつれて、他方が増加するという関係がみられるのか、あるいは両

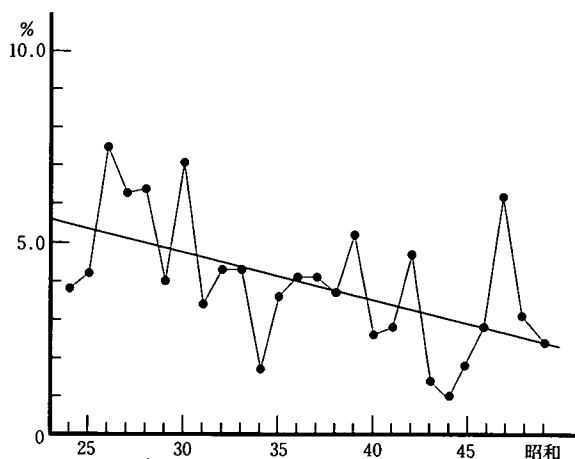


図5 他人への関心・親切・正義感・援助行動の場面

者は相互に独立の関係にあるのか、に関心が向けられた。結果は、表3に示されるように逆の関連を認めることができるものであった。ただし、「無関心」場面は、出現率がきわめて低く、むしろこの漫画終了以降に顕著に現れることになる現象ではないかと推測される。これに対して、「関心」場面は、図5にみられるように大きな振幅を示しながらも、確実に減少の傾向が現れている。

地域社会への関心と共に、いま一つ取り上げたのが「地域の治安」問題である。いわゆるお巡りさんは、わが国特有の制度であるが、地域に常駐する警察官の存在は、住民にとって安全確保の強い味方である。この「お巡りさん」(E3)と、それに敵対する「泥棒」(E4)の出現の様子が、漫画の中の話とはいえ、どのような様態を示すのかを知るべく、カテゴリを設定したものである。

戦後の不安定な社会情勢の時期から、高度経済成長の時代へと社会が豊かに、安定するにともない、凶悪犯罪、財産犯罪は漸次減少していることが、犯罪白書の統計より明らかであるが、一方、粗暴犯、窃盗犯は反対に増加傾向にあることもまた明かにされている。漫画に描かれる「泥棒」は後者が多く、この現実社会の傾向が反映されて、E4の増加傾向の結果を生んだのであろうか(図6参照)。他方「お巡りさん」に関しては、必ずしも「泥棒」と連動しているわけでもなく、時代による変化はみられない。

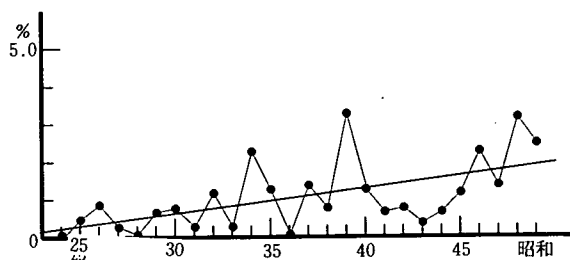


図6 泥棒の出てくる場面

F 地域環境

地域生活における物理的環境問題としては、先に「C 子供の日常生活」の領域のところでも述べた遊び場空間としての広場・公園と、公害、道路環境、風俗環境の4点を取り上げた。

まず、遊び場空間としては、図7の結果が示しているように「F1 地域内の原っぱ、広場、川などが出てくる場面」が、確実に時代と共に減少していることが解る。F2やF3のように、既に整備されて公園や遊園地としての景観を備えている空間は、時代の影響を受けないが、子供たちにとって秘密めいた雰囲気をもっていた空き地や、資材置き場、河川敷などの未整備の土地空間が、地域開発によって次第に建物に代わっていき、子供たちの遊び場を奪っていったことを物語る結果となっている。遊び場がなくなり、遊び仲間がいなくなり、遊ぶ時間がなくなれば、子供をコミュニケーションの発信体・中継体・受信体とし、広場をコミュニケーション

ンの成立のための共有空間、時間をコミュニケーション効率とした場合の簡単なコミュニケーション理論によっても、子供同士の地域コミュニケーションが成立しなくなることは明かなことである。

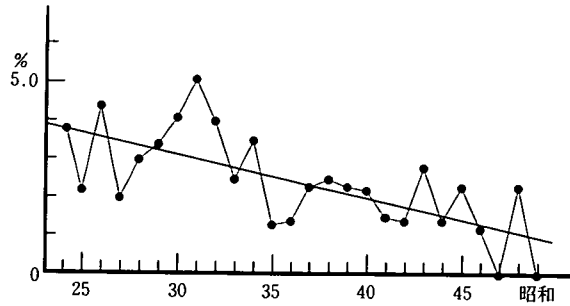


図7 地域内の原っぱ・広場・川などが出てくる場面

F4の公害に関しては、表3にも明らかなように、第4期の終わりから第5期にかけて急激に増えてきたもので、昭和42年の公害対策基本法の制定を皮切りに、43年には大気汚染防止法、騒音規制法などが制定され、人々の関心も高まりをみせたことが反映されているものであろう。その点で、時代の流れと完全に対応している。同様の傾向は、F5の道路環境にもいえ、自動車の増加と共に、過激な事故の場面が描かれるようになってくる。

風俗営業が出てくる場面（F6）に関しては、予めの想定があるわけではなく、環境問題の1側面として用意してみたものであるが、どういう訳か第4期に出現が集中している。この背景については、目下のところ考察不能である。

ともあれ、地域環境も住民生活の観点からは、次第に悪化していることが窺える結果となっている。

G 地域福祉

地域福祉の対象として、老人と浮浪者を取り上げた。

有吉佐和子が「恍惚の人」を書いて老人問題を世の明るみに引き出したのは、昭和47年6月のことであった。「サザエさん」においては、老人は当初より頻繁に登場しているが、そこに描かれる老人の姿は、どれも健康でかくしゃくとしており、仕事や役割をもって地域の一員として生き生きと暮らす生活者であった。それが、第5期に入ると、福祉対象としてのいわゆる“ボケ老人”や“寝たきり老人”が描かれるようになる（G1）。もちろん、それ以上に健康な老人が数多く登場しているのだが、42年に美濃部都政が誕生し、福祉政策を重点課題として標榜したことが、漫画においても45年頃より老人問題となって現れたのであろうと推測される。

他方「G2 浮浪者が出てくる場面」については、豊かな社会の到来と共に着実に出現率が減少している。

IV 結 語

漫画「サザエさん」をマテリアルとして、戦後の地域社会の変貌の様相を、人間関係を中心とする地域コミュニケーションの観点から、「何が」「どれほど」に限って、つまり、地域社会の中にある事象についての時系列の「量的」な変化の様相に限定して、分析してきた。その結果は、これまでみてきたように、ほぼ当初の想定どおりであったと結論づけることができよう。すなわち、旧来の地域社会の崩壊をもたらした要因のうち、人間関係を中心とする地域コミュニケーションを構成するものとして取り上げた7領域、総計35のカテゴリのうちのほとんどに、時間の推移と共に、出現率が直線的に減少または増加していく傾向が有意にみられた。

ところで、「サザエさん」には社会性が欠如しているとしてしばしば批判されたと、樋口は先の番組の中で、それへの反論を込めて語っている。鶴見（1992）は長谷川町子追悼の記事のなかで、その例として「思想の科学」1951年第1号に映画理論家今村太平が書いた「ブロンディーとサザエさん」を取り上げ、「『サザエさん』についての今村の結論は、新聞漫画はプチブルジョワの漫画であり、プチブルジョワは中間的であり、それゆえ笑いは無意味をわらうものであり、無意味な笑いは社会的中間性の表現であるという評価にある。しかし、今村の引く例にあるように、サザエさんが道をおしえてくれた警官に「今の給料であなたはどうやって食べているんですか」とたずねるその積極性は、はたして社会的に無意味だと言えようか」と反論を提出している。

樋口や鶴見の主張と同様、本論考での分析を通して、「サザエさん」が豊かな社会性をもち、その時々々の世相を映す鏡の役割を果たしていたことが明らかにされた。新聞漫画は時代の反映といわれるが、「サザエさん」もその例に漏れるものではなかったことが示されたといえよう。

注

- 1) 1992年7月6日、NHK総合TV「プライム10（10：00～10：45p.m）」放送。

文 献

- 樋口恵子 1978 都市と教育環境 —「点と線」から「面」の回復へ—。都市問題研究, 30(4), 2-13.
 岩原信九郎 1965 「教育と心理のための推計学」日本文化科学社。
 増淵宗一 1991 「ちびまる子ちゃん大研究」日本放送出版協会。
 Milgram, S. 1970 The experience of living in cities. *Science*, 167, 1461-1468.
 見田宗介 1967 「近代日本の心情の歴史 —流行歌の社会心理史—」講談社。
 見田宗介 1965 「現代日本の精神構造」弘文堂新社。
 野崎衣枝 1985 雑誌「主婦の友」にみる主婦像の変遷 —昭和21年から56年まで—。コミュニティ, 75, 1-55。
 清水馨八郎 1969 コミュニティ報告について。国民生活審議会調査部会編「コミュニティ —生活の場における人間性の回復—」大蔵省印刷局。
 高橋勇悦 1984 「都市化社会の生活様式 —新しい人間関係を求めて—」学文社。

- 高橋勇悦 1974 「都市化の社会心理」川島書店。
寺出浩司 1991 「サザエさん」佐々木毅他編「戦後史大事典」289. 三省堂。
鶴見俊輔 1992 日本の変貌ととりくんだ戦後50年の偉大な漫画家 —長谷川町子さん追悼—。朝日新聞
7月2日夕刊(文化)。
植村勝彦 1977 農山村における共同体意識の変容と地域連帯性 —島根県頓原町の調査を例として—。
地域福祉研究, 5, 99-117。
山根佳子 1987 「サザエさん」にみる戦後家庭像の変遷。帝国学園紀要(帝国女子大学・帝国女子短期大
学), 13, 245-263。

(1992年10月31日)

付 記

本小論の脱稿後、東京サザエさん学会編「磯野家の謎」飛鳥新社(平成4年12月18日刊)なる書が出版された。そこには本稿で扱ったカテゴリに属する内容の項目が散見されるが、校正の段階でそれらを参照することは、あえてしなかった。